

第五回 がん哲学塾

ニュースレター

発行日：平成 29 年 4 月 17 日

神戸薬科大学 薬学臨床教育センター

E-mail:juku_0307@yahoo.co.jp

平成 29 年 3 月 18 日、樋野興夫先生の著書の中の一節
「病気であっても、病人ではない」を用いて、読書会という形で、
第五回がん哲学塾を開きました♪



「第五回がん哲学塾を開いて」

神戸薬科大学 薬学臨床教育センター

6 年生 浅田 聖士

神戸薬科大学 11 号館にて、第五回がん哲学塾を開催しました。今回も樋野興夫先生の著書「いい覚悟で生きる」を読み、みなさんで思ったこと、感じたことを語り合いました。今回読んだ一節は第 4 章・乗り越えるより「病人であっても、病人ではない」です。サブタイトルとして「自分の境遇を固定して、限られた視界から物事を見るよりも、俯瞰的な視点から気づくことは多いはずです。」と記されていました。

樋野先生の著書に限らずよく耳にする、「俯瞰的な視点で物事を見る」。この行為は、私にとって、わかるようでわからない少し曖昧なものでした。樋野先生はこの一節の中で「俯瞰的な視点で物事を見ると、今抱えている悩みが、意外と小さなものだと気付くことができます。つまり、物事の本質を見極める視点を持つことであり、それは、自分自身を取り戻すきっかけになります。」と話されています。一緒に参加して下さった沼田先生が「俯瞰的にみる方法(ハウツー)を持っていますか？」と参加者に質問を投げかけられ、そこで私の頭に真っ先に浮かんだのは、ただひたすら泣くという行為でした。

瞬時にその答えが浮かんできたことには、一つの理由があったと感じています。

昨年の 6 月に亡くなった母の遺品を整理していると、私の幼稚園時代の連絡帳が出てきたのです。そこには母と幼稚園の先生が書いた私についての連絡事項がたくさん書かれています。その連絡帳の中身を見て気付いたのは、幼稚園時代の私は泣き虫で毎日のようにぐずり、涙を流していたということでした。それがいつしか年齢を重ねることで、涙を流すという行為が少なくなり、泣き虫だったということもあまり考えずに過ごしていたような気がします。母の死をきっかけに、私は毎日のように母のことを思い出しては涙を流し、その度に自分を落ち着かせ、感情をコントロールし、日々の出来事について静思していたように感じます。

つまり、これが俯瞰的な視点で物事を見ることに繋がるのではないかと思うようになりました。

俯瞰的な視点で物事を見る方法として、今起こっていることやそれについて考えたことなどを、手を動かして文字にしてみる。そうすれば頭で考えていたことが整理され、具体的にやらなければいけないものが見えてくる。また、今起こっていることが自分にとってどういう意味なのか、なぜ私のところに来たのかを考える。

そうすれば、今の私の役割を感じるができる。など、日々みなさんが実践されている方法をお聞きしました。ただなんとなく生活をしていると、不意に私の言動が目先のことに捉われていて、そして近視眼的に物事を判断してしまっているということに気付かされます。今回のがん哲学塾をきっかけに、日々の生活での出来事に、もっと俯瞰的にもっと視野を広げて考えるべきだと改めて感じることができました。気持ちに余裕をもって生活できるようになるには、俯瞰的にみる訓練が必要なのだと感じた第五回がん哲学塾でした。

「第五回がん哲学塾を開いて」

神戸薬科大学 薬学臨床教育センター

5年生 大林裕典

前回と同じ読書会という形で樋野興夫先生の『いい覚悟で生きる』の一節、「病気であっても、病人ではない」を朗読し、参加者の感想を言い合った。

この一節は自分ともう一人のゼミ生とで選んだものである。

自分が選んだ理由としては「あわてて、あれこれ予防をしたところで、がんになるときはなるものです。そのとき、病人の人生に甘んじてしまうのか、自分の人生を見失わないでいられるのか。」という一文に感じるものがあつたからである。

またそれが分かっていたとしても、いざ自分が重い病気にかかったときに、割り切って考えられるか疑問に思った。

前回のがん哲学塾で「がんと言われて何故前向きでいられるのか？」という質問があつた。その時自分はあまり深く考えず、がんになったのは仕方ないことだから、そう思うしかないと軽く思っていた。今回同じ様な内容の文章を読んで改めて考えてみると、やはりそう簡単には思えないのだろうと感じた。

全体を通しての感想は、他の参加者の違った視点からの意見を聞いてみて、自分で文章を読んで納得していた内容でもその部分の感想を他の人から改めて聞くとより深く考えることができた。今更ながら、物事を理解することには第三者の意見も大切である、と今回のがん哲学塾で自分の考えが少し変わった。このような様々な人の意見を聞ける場に意欲的に参加していきたい。

「患者さんの想い」

神戸薬科大学 薬学臨床教育センター

5 回生 川口真奈

平成二十九年、三月十八日に第五回目のがん哲学塾を行いました。

今回は「病気であっても病人ではない」についてでした。

このテーマを決めたのは、健康な人がこの言葉を見ると確かにと思えるかもしれませんが、その言葉の意味についてゆっくり考えることもできると思います。

しかし患者さんの立場からするとこの言葉はすぐ納得できる言葉なのか？と疑問に思えたのがきっかけで、タイトルをみても内容を読んでもまず思えたからでした。

一人一人どんな病気で悩むのか、どんな言葉を言われると落ち着くのか、様々だと思います。

それによって視界が狭いか広くなるのかが変わると思います。

私は乳がんで母を亡くしています。私自身、母を病人として認めることができませんでした。

でも周りからすると病人と思えるのだと思います。

だからとは言えないですが正直悩んでいた時期もありました。それは母が好きだったからですし、母も周りの人に病気のことを言わないでほしいと言われたこともありました。母も病人と思われたくないという気持ちがあったからだと思います。

そもそも病人ではないと思えるのはどんなときなのかと考えました。

家族や友達と話しているとき、自分の好きなことをしているとき、仕事又は勉強をしているとき、それもまた人それぞれだと思います。健康であっても病気になっても、みな一人の人であるのには違いもないです。今後私の周りの方々が病気になったとしたら私はその方々のことも病人ではなく一人の人として接していきたいと思っています。

ただ感情移入しすぎないように、相手に気をつかわせないようにしていきたいですね。

改めて「病気であっても、病人ではない」というテーマについて深く考えることもできました。

第五回がん哲学塾を今回行い参加することができ、心から嬉しく思います。



次回のがん哲学塾の日程は、

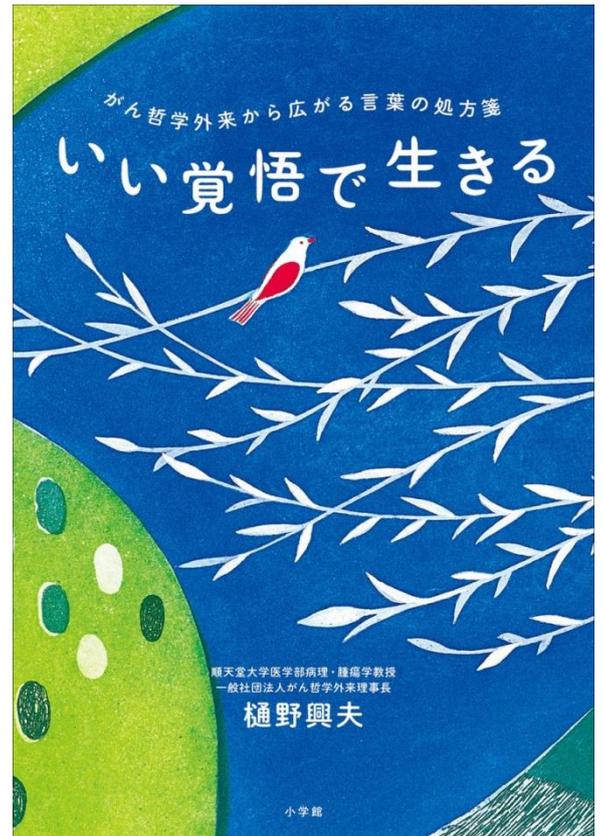
5月20日です♪

樋野先生の著書である『いい覚悟で生きる』のある1節を、その場で読んで、思ったことなどを話し合う会です☆



【樋野興夫先生】

順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授、医学博士。
米国フォックスチェイスがんセンター、
がん研実験病理部部長等を経て現職。
2008年「がん哲学外来」を開設。
高松宮妃癌研究基金学術賞受賞。
著書に『いい覚悟で生きる』ほか



顧問：樋野興夫
教頭：沼田千賀子
副塾長：横山郁子
塾生：浅田聖士、高橋佳孝、武七海、朴聡美
青柿和樹、大林裕典、川口真奈